

なごみつうしん

発行日：平成 30 年 8 月 27 日（第 44 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

「奇跡がくれた宝物」—いのちの授業—のあとがきを紹介します。ボランティアに来た学生さんなど見学に来てくれた人から、私たちが学ぶこともいろいろあります。そんなことを教えてくれた感想文です。

所長 小沢 浩

～あとがき2～

さて「いのちの授業」は、いつ行うのがいいのか。ここに、島田療育センターはちおうじにボランティア実習にきた大学生の感想文を紹介する。

「実際に接してみると、年齢に比べて遅れはあっても読み書きや計算ができたり、一緒に遊んだりしゃべったりできる、どこにでも居そうなお子さんたちでした。障害が疑われるまたはあると聞くと、会話が成り立たないのではないかなどと、無知ゆえに偏見を持ってしまいがちです。自分が「障害」という言葉に過剰反応していたことに気づきました。小学校で当時という特殊学級の児童と交流はあっても、成長してものごとが分かるようになってからは交流がなくなるというしくみは問題だったと思います。

療育についても誤解していました。子どもに特殊な訓練をして「普通」に近づけることだと思っていました。実際は、周りの大人が関わり方を変えることや、本人が暮らしやすくなる方法を身につけることが重要だと知りました。子どもに強い薬を出しすぎる精神科もあると聞いたことがあったので、その意味でも安心しました。また、親と学校と本人とで現状の認識や望む支援

に違いがあること、家庭や学校や地域の問題も子どもに表れること、開示できるようなカルテを書かなければいけないこと、両親の承諾が無いと面談もできないことなど、児童福祉の厳しさを垣間見ました。待合室での保護者の方の様子は様々で、保護者の方の生きやすさも大切だと思いました。

初めて通所の利用者さんをお見かけしたとき、小さくて細いことに驚きました。近くで話しかけたり手を握ってもらったりしているうちに、普段接している人とはいろいろなことが違うはずなのに特になんとも思わなくなりました。重症心身障害者の方と一緒にいると、生きていることが尊く、何か助けになれるのなら私も動きたいと自然に思うようになりました。コミュニケーションが困難な利用者さんが話し声や歌や絵本で笑ったときは本当にうれしかったです。大学には心について難しい本を読んで勉強している学生がたくさんいますが、体験して感じることも大切でしょう。」



『奇跡がくれた宝物』

小沢浩 著

クリエイツかもがわ

より発売中